

新刊紹介

アジア経済研究所 企画・鈴木均編著 『ハンドブック現代 アフガニスタン』 アフガニスタン 明石書店、二〇〇 五年

牧野百恵



九・一一同時テロ後、アフガニスタンは国際社会の注目を浴びたが、同時に、一般に我々のアフガニスタンに対する理解がいかに低いか、研究蓄積がいかに少ないかが明らかとなった。アフガニスタンは、一九七九年末のソ連軍の侵攻以後、米ソ冷戦という国際関係の大枠において、またイランやパキスタンなど近隣諸国との関係において、研究の対象となることはあっても、アフガニスタンそのものが研究の対象となること

はほとんどなかった。それには、ソ連軍の侵攻とそれに続く二〇年にもわたる戦争状態のため、研究のベースとなる資料が十分でないという問題もあった。資料の不備は新政権が誕生した今でも解消されたわけではもちろんなく、研究を進めることが困難であることは否定できない。そのようななかで本書は、「将来的なアフガニスタン地域研究のための小さな出発点となること」を目的として出版された。本書は以下に紹介するように、序論とそれに続く全五章からなる。

序論は「アフガニスタンの地理的な位置について」述べるが、それは内陸国アフガニスタンが近隣諸国や大国の国際関係で語られることはあっても、アフガニスタンそのものに焦点があたるのが少なかったという本書の問題意識と密接に関係する。本書がアフガニスタンそのものに焦点をあてた研究の出発点として位置づけられるにもかかわらず、そのアフガニスタンは周辺国との関係を抜きにしては語れないという特殊性が、序論においてははっきりと示されている。

第一章「アフガニスタン現代史の概説」は、「ソ連軍侵攻からムジャヒディーン政権樹立まで」、「ターリバーンの登場から新憲法制定まで」、「中央アジア世界とアフガニスタン」の全三節からなっている。一九七九年のソ連軍侵攻とそれ以後一〇年にもわたる戦争状態は、冷戦と

いうコンテキストで始まったために、米ソ両大国と、その利権と絡むイランやパキスタンとの関係において注目されたが、それによってすべてを説明することはできない。ソ連軍侵攻がきっかけであったとはいえ、アフガニスタン国内のムジャヒディーン・グループが対ソ連で団結して戦ったわけではなく、各グループが自己の利権のために離合集散を繰り返したことが戦争を長期化させた最大の要因であるという。アフガニスタン国内に焦点を当てることで、その無秩序な状態のなかから秩序回復を掲げるターリバーン政権が誕生し、また現在もなお、独自の経済力・軍事力をもつ軍閥が復興の障害であり続けている背景を、本章からはっきりと読み取ることができる。

第二章「地方・農村部の諸問題」は、「その後のアフガニスタン農村」、「農村部におけるシュエラー創設活動」、「アフガニスタンの麻薬経済と密輸」の全三節からなっている。麻薬経済と密輸は、アフガニスタンの戦乱と無秩序状態と密接に関連しており、それらの経済活動から得られる収入は地方軍閥の資金源となってきた。また本章の醍醐味は、現在の農村の様子や、国連機関が主導する農村部でのシュエラー（議会）創設活動に従事している職員へのインタビューなど、実際にアフガニスタンの農村を訪問しなければ分かりえない生き生きとした情報が盛り込まれていることである。

第三章「基本文献解題」は、「近代史—国家形成過程」、「現代政治関係」、「経済情報」の全三節からなっている。本章に収められた書籍や辞書などの研究上のツールは、アフガニスタンを研究対象とするにあたっての基本文献である。

第四章「資料」は、「アフガニスタンの憲法史とロヤ・ジルガ」、「アフガニスタン新憲法翻訳」、「現代アフガニスタン政治の主要組織および人物」、「アフガニスタン」年表の全四節からなっている。二〇〇四年一月四日に採択されたアフガニスタン新憲法の論考と翻訳という最新の資料が収められている点は本書の売りである。また憲法は、軍閥などの地方勢力が根強いアフガニスタンで、一国の統合を象徴するという観点からも重要な資料である。

第五章は、アジア経済研究所図書館が所蔵する「アフガニスタン関係文献目録」であり、アジア経済研究所図書館ウェブサイト上、OPAC (<http://opac.aei.go.jp>) から検索可能な文献が列挙されている。

このように本書は、アフガニスタンを研究の対象とする者にとって、入り口としての基本文献であると同時に、第三章から第五章は研究上のツールとして活用することができ、研究者に限らず、研究的関心をもつ学生やビジネススマンなど幅広い読者層を意識した構成となっている。

(まきの ももえ/アジア経済研究所地域研究センター)